お医者さんとどう向き合う？

第5部 すれ違う医師と患者

② ドクターが病に倒れたとき

安心求める気持ち 身をもって

医師も病気にかかり、患者になることがある。突然、がんを告知されることもある。そんなとき、医療の現場はどう見え、何に気付かされるのだろう。

呉市国民健康保険安浦診療所の井上林太郎所長(58)は、がんを経験した内科医だ。42歳の時、右手首に悪性の滑膜肉腫が見つかり、肘から先を切断した。

当時、広島市近郊の病院に勤めていた。手首の腫れが引かず、医師としての直感が働いた。「がんかもしれない」

紹介された病院へエックス線撮影に行くと、担当技師がさらりと聞く。「手が腫れていますが、どうされたんですか。交通事故ですか」。思わず、むっとした。「命にかかわる病気かもしれないのに、人の気も知らないで」。その一方で、はたと気付いた。「何げない言葉でも気に障る。それが患者の気持ちなのか」と。

ささいな言葉や、行き届かない対応が患者の心を傷つけてしまう。振り返ると、自身も医師になりたての頃にあった。入院患者が「調子が悪い」と院内の電話で連絡してきた。ところが急患が入り、診察に向かえない。事情を伝えていなかったせいか「なんで診てもらえんのか」とひどくとがめられた。

患者は病状だけでなく、家族や生活環境、人柄も異なる。一人一人にどう寄り添うか。医学部時代、そのための教育は受けなかった。医師になってからは治療テクニックの向上に全力を注いできた。「ある意味、病気を見つけるのに夢中だった」

がんを経験し、患者との向き合い方は変わったという。9年前に着任した安浦診療所では1日に40～50人を診る。「よかったですね」。病気が見つからなかったとき、治ったとき、患者と喜び合う自分がいる。

ただ、常勤医は井上所長だけだ。1人当たりの診療時間は長く取れない。合間を縫って、患者や家族の携帯電話にショートメールを送る。「検査結果が出たよ」「薬をやめてみませんか」。ちょっとしたやりとりだが、受診前の心の準備が安心感につながる。

「患者さんも一生懸命です。そこにどう伴走していくか、真剣に考えたい。僕は今、がんになってよかったとも思っています」

患者になって初めて、いつもの病院の風景が流れ作業のようで事務的に思えたという医師もいる。

「入院中は冷たいなって思うこともありました」。落久保外科循環器内科クリニック（広島市西区）の落久保裕之院長(56)は、9年前を思い起こす。白血病に進行しかねない骨髄異形成症候群を患い、市内の病院で骨髄移植を受けた。

喉が腫れ、食事もできない。髪が抜け、酸素吸入もした。落久保院長が闘うそばで、病院スタッフは「冷静だった」。吐血したときも、看護師は驚くことなく薬を飲むよう促す。検査も手際よく進んでいく。

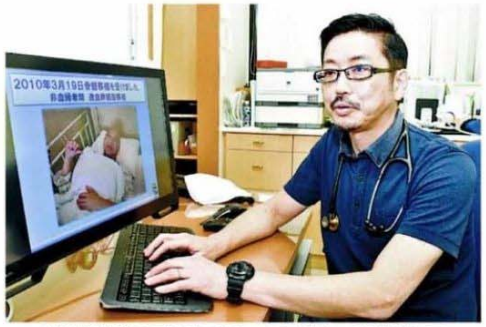
「いかに早く病気を治すか。病院で最優先されるのは、冷静な観察と治療。そこに集中し、奮闘している」。落久保院長もそう理解していた。開業前、病院勤務の経験もある。それでも、自身が患者になってあらためて考えさせられた。「患者側はどうしても安心できる声掛けや説明を求めたくなるんです」

落久保院長は自らの闘病経験を踏まえて言う。「私たちかかりつけ医が病院と患者の間に入っていくことが大事」。病院で受けた診療説明を分かりやすく伝えたり、退院後のリハビリや在宅医療を望む人を受け入れたり。「病院との役割分担と連携を進め、治し、癒やす医療の充実に力を尽くしたい」

（林淳一郎）

次回は7日に掲載します

外来で診察する井上所長。がんで右肘から先を失ったが「患者さんの気持ちをくんだ診療に取り組むきっかけになった」と話す
（呉市安浦町の市国民健康保険安浦診療所）



骨髄移植後の写真をパソコンで眺め、患者として過ごした頃を振り返る落久保院長
（広島市西区の落久保外科循環器内科クリニック）

連絡帳

落久保外科循環器内科クリニック
落久保裕之院長から

なぜ、こんな症状が出るのか。よくあることなのかどうか。病気になると疑問がいくつも湧いてきます。私も大きな病を患い、不安になる気持ちをあらためて実感しました。**医療者は治すことに集中しますが、「なぜ」を解く丁寧な説明や優しいひと言があれば患者さんの安心感は高まる。**すれ違わないためにも、その意識を医療者が持つことが大切ではないでしょうか。

中国新聞デジタル版より